

NACOME

全国大学音楽教育学会 関西地区学会
平成 30 年度 後期研究会

平成 31 年 1 月 6 日 (日) 13 : 00 ~ 16 : 45

三木楽器開成館

大阪市中央区北久宝寺町 3-3-4

主催 全国大学音楽教育学会 関西地区学会

全国大学音楽教育学会 関西地区学会

平成 30 年度 後期研究会

プログラム

I. 学会諸連絡 (13:00) 司会: 山岸 徹

学会諸連絡、理事会報告、その他 (山岸 徹、丸井理恵、桐山由香、岡田知也)

II. 研究口頭発表 (13:15~13:45)

1. 安本 末味 (大阪府立東百舌鳥高等学校)

高等学校の能鑑賞における体験と協働学習の効果についての一考察

III. 研究演奏発表 (13:47~15:00)

1. ピアノ独奏 田中 慈子 (京都光華女子大学)

シューベルト作曲: 「4つの即興曲」作品90 より 第4番 変イ長調

2. ピアノ独奏 小谷 朋子 (常磐会短期大学)

ドビュッシー作曲: 「映像 第1集」より
『水の反映』

* * * * *

3. 独 唱 ソプラノ 篠原 美幸 (大阪教育大学)

ピ ア ノ 丸井 理恵 (常磐会学園大学)

田中ナナ 作詞/中田喜直 作曲: 「おかあさん」

サトウ ハチロー 作詞/中田喜直 作曲: 「ちいさい秋みつけた」

文部省唱歌: 「冬景色」

林 古溪 作詞/成田為三 作曲: 「浜辺の歌」

* * * * *

4. 作品発表 山岸 徹（大阪キリスト教短期大学）
独唱 桐山 由香（大阪青山大学）、ピアノ 山岸 多恵（兵庫教育大学）
三浦照子 作詩／山岸 徹 作曲：「縹色の刻（はなだいろのとき）」

* * * * *

5. ピアノ連弾 久野 以早夫（東京福祉大学名古屋キャンパス）
藤本 逸子（東海学園大学）
モーツァルト 作曲：「四手のためのピアノソナタ」K.521 より 第2楽章

6. ピアノ連弾 鷺見 三千代（園田学園女子大学短期大学部）
古庵 晶子（京都ノートルダム女子大学）
ビゼー作曲：「こどもの遊び」作品22より
1『ぶらんこ』、2『こま』、12『舞踏会』

7. ピアノ連弾 西本 由香（兵庫大学）
永井 正幸（大阪青山大学）
アレンスキー作曲：「子どものための6つの小品」作品34より
1『おとぎ話』、5『子もり歌』、6『ロシアの主題によるフーガ』

8. ピアノ連弾 白倉 朋子（大阪芸術大学）
深田 直子（大阪総合保育大学）
ドビュッシー作曲：「小組曲」作品34より
3『メヌエット』、4『バレエ』

9. ピアノ連弾 川畑 尚子（大阪キリスト教短期大学）
山内 信子（聖和短期大学）
ピアソラ作曲・山本京子編曲：「リベルタンゴ」

* * * * *

休 憩

IV. 講演 (15:05~16:35)

講師：奥 忍 氏

演題：「楽しい音楽の学び」から「音楽の楽しい学び」へ

日本の音楽学習はこれまで「楽しさ」に重点があったように思われる。「音楽は楽しくなくてはね」が前提になってカリキュラムが組成され、教材が選ばれていたように思われる。各種音楽教材の中に短調の曲が余り見られないのはその一つの表れであるだろう。「楽しい音楽」を求める結果、音楽について考えたり理解することはおろそかにされる。結果として、小学校1年生の「音楽」の教科書から五線譜が掲載されているにもかかわらず、「楽譜が読めません」と臆面もなく述べる大学生や社会人を私たちは育ててきたように思われる。

他方、外国の学校を訪れると、子どもたちが「音楽の授業」で「学び」をしていることに驚かされる。幼稚園児も身体を動かしたり、歌ったりしながら音楽の構造に気づき、その気づきが次の学びへと繋がっている。日本の音楽教育と何が異なるのだろうか。

今回の研究会では、この機会に「楽しい音楽」だけでなく、「悲しい音楽」「気持ちを昂揚させる音楽」「語りかけるような音楽」など様々な音楽を「楽しく学ぶ」方法についてご参加の方々と一緒に考えてみたい。

質疑応答 司会：永井 正幸

【奥 忍 先生 プロフィール】

東京芸術大学音楽学部楽理科卒業後、京都府立木津高等学校教諭、奈良教育大学、和歌山大学、岡山大学、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科で研究・指導に携わる。現在、関西外国語大学非常勤講師。その間にロンドン大学教育研究所、メルボルン大学、ウィーン音楽大学にて研鑽を積み、退職後に京都嵯峨芸術大学大学院芸術研究科を修了。視覚・聴覚・身体性を統合した芸術教育の研究を行っている。日本音楽表現学会では事務局長、会長等を歴任、日本音楽教育学会では、常任理事、地区代表理事、編集委員等歴任、現在広報委員長。International Society for Music Education (ISME) では「学校音楽教育と教師教育委員会」委員、常任理事など歴任、Asia-Pacific Symposium for Music Education Research (APSMER) では理事を務めるなど、国内外で活動してきた。これまでに「学者・研究者のための奨励賞 (Australia-Japan Foundation)」「藤堂音楽賞」「大覚寺賞」を受賞。

研究口頭発表要旨

1. 高等学校の鑑賞における体験と協働学習の効果についての一考察

安本 末味（大阪府立東百舌鳥高等学校）

本研究は、学校教育で行われる鑑賞学習に集中して取り組むことが難しい児童・生徒が増加していることに問題意識を持ち、教育実践を通して、その解決方法を考察することを目的に行った。

児童生徒の芸術の嗜好と国語能力の個人差も鑑賞活動を難しくしていると考えられるが、筆者は、鑑賞することが難しい題材を集中して視聴し、深く理解するには、1. 体験すること、2. 体験によって得た感覚などを言語化すること、3. 他者の感じ方・価値観に触れることを目的にディスカッション（協働学習）の機会を持つこと、が有効であると考えた。本実践は、2012年から2018年まで、能を題材に大阪府立高等学校で実施した。

実践の結果、楽器の体験を伴う鑑賞学習が、音へ傾聴を促し、同じ体験をした生徒同士による協働学習が、鑑賞作品への理解を深める効果をもたらすことがわかった。実際に、体感によって得た感覚を言葉で表現し、さらに他者と共有することによって、鑑賞活動が活発化すると考えられる。

研究演奏発表要旨

1. ピアノ独奏 シューベルト作曲：「4つの即興曲」作品90 より 第4番 変イ長調

田中 慈子（京都光華女子大学）

現在、3回生半期、4回生通年でゼミを開講し、教員養成・保育者養成校で学ぶ学生のうち、音楽分野を研究する14名の指導にあたっている。4回生では、卒業研究として、各々が選択した曲目を卒業演奏会で発表することに加え、演奏曲目に関する卒業論文を執筆する。今年のゼミ生の表現に対する意欲は、筆者の予想を超えて高く、歌うことや呼吸、色彩に意識しながら取り組んだ学生もいた。そこで、本研究会では、あえてシューベルトの即興曲を取り上げることとする。

即興曲集 作品90は、シューベルト最晩年の作品で、同じ時期には代表作の《冬の旅》が書かれている。即興曲というタイトルは、作曲者自身ではなく出版社が名付けたものであるが、ピアノで歌うことを追求したシューベルトらしい小品となっている。本日演奏する第4番は、短調と長調の間を移ろいながら、微妙な表情をみせるアルペジオが大変美しい。この色彩の変化と曖昧さこそが、シューベルトの魅力の一つであろう。

2. ピアノ独奏 ドビュッシー作曲：「映像 第1集」より 『水の反映』

小谷 朋子（常磐会短期大学）

ドビュッシーのピアノ作品には水をモチーフに書かれたものが多く、具体的には「水の反映」「水の精」「雨の庭」「金色の魚」「沈める寺」等が挙げられる。また何れの曲もドビュッシーの作曲時代において中後期に書かれていることも興味深い。

一方ドビュッシーと同じく印象派の作曲家ラヴェルも水をテーマに「水の戯れ」「オンディーヌ」等のピアノ作品を書いているが、実際作曲のスタイルに注目して弾き比べると、両者の水に対する見方や捉え方には大きな相違点がある。特に、ラヴェルは「水の戯れ」において水を至近距離で緻密に観察し、高純度な水の躍動をリズムカルに描写しているが、それと対照的に、ドビュッシーは「水の反映」において池から少し離れた地点から風や光を感じつつ、水面に揺らいで映る木々や雲の動きを眺めているうちに、いつの間にか水辺の情景を自らの思いに寄せているようである。

「水の反映」は、われわれ人間の巡り移ろいゆく思いの投影とも言える曲ではないだろうか。

研究演奏発表要旨

3. 独 唱 田中ナナ 作詞／中田喜直 作曲：「おかあさん」
サトウ ハチロー 作詞／中田喜直 作曲：「ちいさい秋みつけた」
文部省唱歌：「冬景色」
林 古溪 作詞／成田為三 作曲：「浜辺の歌」

ソプラノ 篠原 美幸（大阪教育大学）

ピアノ 丸井 理恵（常磐会学園大学）

今回演奏するこの4曲は、保幼小中で必ず歌われている曲であり、2007年文化庁が選定した「親子で歌いつごう 日本の歌百選」に選ばれている。また「おかあさん」「ちいさい秋みつけた」「冬景色」の3曲は、本学会25周年記念事業として編纂された「明日へ歌い継ぐ、日本の子どもの歌—唱歌童謡140年の歩み」にも収録されている。

「おかあさん」は保育現場で歌われるだけでなく、詩が小学校における国語教材として掲載された時期もある。「ちいさい秋みつけた」は1955年NHKの委嘱によって作られ、後に教科書にも採用されるようになった。「冬景色」は小学校5年生共通歌唱教材であり、1932年第1回NHK全国学校音楽コンクールの課題曲でもあった。「浜辺の歌」は中学校の歌唱共通教材であり、採用試験の課題曲にも頻繁に用いられている。尚、「冬景色」伴奏については、今回は1番を教科書『新訂尋常小学唱歌伴奏附 第五学年用』掲載のもの、2番は小六禮次郎編曲のものを使用した。

4. 作品発表 三浦照子 作詩／山岸 徹 作曲：「縹色の刻（はなだいろのとき）」

山岸 徹（大阪キリスト教短期大学）

独 唱 桐山 由香（大阪青山大学）

ピアノ 山岸 多恵（兵庫教育大学）

詩人・作曲家・演奏家によるコラボレーションの場である「ひょうご日本歌曲の会」での活動を通じて詩人・三浦照子氏に出会い、三浦氏の詩により今までに6曲の歌曲を作曲した。

この曲のタイトルにある縹（はなだ）色は、ほのかな色調の深いブルー。夕暮れ時のおぼろげな空と海の境のイメージを、決して届くことのない対象への思いと捉え作曲した。

平素、勤務先短大他では、音楽理論や伴奏付けなど以外にも、こどもの歌や合唱、アンサンブルなど多岐にわたる指導活動を行なっている。一方で学外においては作品発表などの活動を通じて多くの演奏家や詩人の方々と交流する機会を持つように心がけているが、そのような場で自分自身が実際の音楽創造に関わることが、教育活動における原動力となっていると考えている。

本日、自作品を演奏していただけることに心から感謝しております。

5. ピアノ連弾 モーツァルト 作曲：「四手のためのピアノソナタ」K.521 より 第2楽章

久野 以早夫（東京福祉大学名古屋キャンパス）
藤本 逸子（東海学園大学）

本曲は、1787年5月29日に、ウィーンで作曲されている。この日の前日5月28日に、モーツァルトの父親レオポルトが死去している。モーツァルトは、父親の死を知らずに本曲を作り上げたものと思われる。本楽章は三部形式で、その中間部に二短調が現れるが、悲しみを感じさせる曲調ではない。

本楽章は、「愛」に満ちた会話を感じられる。ここで言う「愛」は恋愛における「愛」ではなく「慈愛」の「愛」である。しかも宇宙を感じさせる大きな「慈愛」が、込められている。太陽は、我々に命を与えてくれる。夜空の月の満ち欠けは、我々に哲学的思いを巡らす機会を与えてくれる。満天の星は、我々に癒しの時を与えてくれる。

本楽章のプリモとセコンドは、掛け合いのような会話は行っていない。各々の役割のうえで、濃やかな会話を行っている。この濃やかな会話の中で、上記の大きな「愛」を表現したい。

6. ピアノ連弾 ビゼー作曲：「こどもの遊び」作品22より 1『ぶらんこ』、2『こま』、12『舞踏会』

鷲見 三千代（園田学園女子大学短期大学部）
古庵 晶子（京都ノートルダム女子大学）

「こどもの遊び」OP.22は、歌劇「カルメン」の作曲家として有名なフランスの作曲家ジョルジュ・ビゼー（1838～1875）が32歳の時に作曲した作品で、自身が「素朴なスケッチ」と語っているように、次々と湧く楽想から生まれたデリカシーと機知に富んだ曲集である。全12曲の中から第1曲 ぶらんこ（夢想）・第2曲 こま（即興曲）・第12曲 舞踏会（ガロップ）を選曲した。ベルリオーズやリストにも絶賛されたビゼーのピアノ演奏は絢爛たる演奏技巧と共に繊細で甘美な音色を持っていたと言われている。オペラの作曲を目指してピアニストより作曲家の道を選んだ彼が作曲したこの作品は、通常の連弾より4手が各々にオーケストラの各パートを奏でるように独立した表現を担って、立体的な音楽を形作っているところが多いため、集中して充分注意しながら演奏したい。また、聴き手が標題の表現を忠実にイメージして頂けるようお願いしながら演奏したいと考えている。

研究演奏発表要旨

7. ピアノ連弾 アレンスキー作曲：「子どものための6つの小品」作品34より

1『おとぎ話』、5『子もり歌』、6『ロシアの主題によるフーガ』

西本 由香（兵庫大学）

永井 正幸（大阪青山大学）

ロシアの作曲家アレンスキー(1861-1906)は、リムスキー＝コルサコフに師事し、ピアニストや指揮者として活躍した。また、優れた教育者でもあり、ラフマニノフの師としても知られている。その音楽は、ロマン的情緒を重んじた作風となっており、チャイコフスキーから影響を受けたことも大きい。

「子どものための6つの小品 Op.34」は、抒情性や哀愁漂う旋律が織り交ぜられた連弾作品集であり、子どもの感性を高め、想像力を豊かにする効果を持つ小品が並べられている。

今回は、以下の3曲を抜粋し、アンサンブル指導に活用できる効果的な曲想・技術表現について研究演奏発表を行う。

1. 「おとぎ話」

どこか寂しくもの悲しいロシア的情緒を想起させる旋律で始まるが、劇的高揚を経て、最後は喜びに満ち溢れたト長調で終わる。調性及び速度変化が多く、多彩な表現が求められる。

5. 「子もり歌」

やわらかく呼吸をするような動きの上に、穏やかで優しい子もり歌の調べが奏でられる。

音色を意識したレガート奏法が重要である。

6. 「ロシアの主題によるフーガ」

Primo と Secondo の旋律や様々なアーティキュレーションの掛け合いを描き出しながら、華麗で勇壮そして堂々とした曲想を表現する。

8. ピアノ連弾 ドビュッシー作曲：「小組曲」作品34より

3『メヌエット』、4『バレエ』

白倉 朋子（大阪芸術大学）

深田 直子（大阪総合保育大学）

ピアノ指導の中で、学生の演奏に少し伴奏やメロディーと一緒に弾いてみると、決まって「綺麗！」や「自分がとても上手になった気がする！」など、前向きな感想が返ってくる。ピアノ初心者で練習に行き詰まっている学生や、ある程度弾くことができる学生が、それぞれのレベルに合った連弾曲を演奏することで、より意欲的に取り組むことができるだろう。

今回演奏するドビュッシーの「小組曲」は、ドビュッシーの初期の作品である。独特な音感覚があり、甘い絵画的な幻想がある。これは後期ロマン主義的なものへの接近を感じさせはするが、描写的ではなく、瞬間の印象を尊重する傾向を見せている。

本日は全4曲のうちの後半2曲を演奏する。

3.メヌエット

上品な舞踏を彷彿させる優美なメロディーによって、メヌエットを踊っている人たちのかもしだす雰囲気を描いている。

4.バレエ

均齊のとれたリズムの美しさがいきいきと息づいている楽しい曲で、中間部はワルツのテンポに変わり、次第に音量を増しながら力強く華麗に最後を飾る。

9. ピアノ連弾 ピアソラ作曲・山本京子編曲：「リベルタンゴ」

川畑 尚子（大阪キリスト教短期大学）

山内 信子（聖和短期大学）

「リベルタンゴ」は、ピアソラが「リベルタ（自由）」と「タンゴ」をつなげて名付けた造語であり、舞踊作品というよりタンゴのリズムを活かした音楽作品である。アルゼンチンで生まれたピアソラは、タンゴ好きの父親からバンドネオンを与えられ、数年後には自分の楽団を持つまでになるが、ダンスを“踊るために書かれたタンゴ”に行き詰まりを感じるようになる。しかし自分の音楽を模索するために渡ったパリで、「決してタンゴを捨ててはいけない」とある先生に諭され、“聴くためのタンゴ”を追求し続けた。そして1970年代、彼は当時の若者たちに人気のロックをタンゴに取り入れようとした。それが「リベルタンゴ」である。リズムは、その特性を捉えて演奏できるかどうかで、聞き手の印象が大きく変わると考える。今回、音楽を理解するために重要な要素となるリズムに着目し、タンゴのリズムを活かした音楽作品を連弾で奏でることで、アンサンブルの技法とリズムの多様性を習得したい。